

「パブリック・ヒストリー」(public history) という表題をみて、みなさんは、一体どういう歴史学を想像したのでしょうか。今回は、まだ日本では馴染みのない、このパブリック・ヒストリーという新しい歴史学の考え方についてお話ししたいと思います。

実は私自身が、この問題に関心をもち始めたのは、今年度の特殊講義を準備している時でした。特殊講義では、いくつかのトピックを取り上げましたが、その中の一つが「地域解体の社会史」というテーマです。講義では、アメリカ中西部の町セントルイスを取り上げながら、アメリカの都市社会が壊れていく様子を考察しようとしてしました。私がセントルイスを初めて訪れたのは、10年ほど前のことです。その時の忘れることの出来ない光景の一つが、ダウントウンからミッドタウンに向かう近郊電車の車窓からみた風景でした。ダウントウンの高層ビル街を抜けたとたん、突如として眼前に広がったのは、打ち捨てられた殺伐とした空間だったのです。見渡す限りの、人が住んでいる気配のない荒涼とした風景の中に、朽ち果てた貨物車両や荷物置き場が、まるでオブジェのように散在していました。「荒廃した都市」——これが私にとってのセントルイスの最初のイメージでした。そして、この不毛な砂漠のような風景——ダウントウンはそれに抗いながらも、飲み込まれつつあるように思われました——との出会いが、「地域解体の社会史」を考えるきっかけとなったのです。

講義の準備のため、セントルイス関連の資料や文献を整理していく中で、私はこのエリアが、かつて“Mill Creek Valley”（「ミル・クリーク・ヴァリー」）と呼ばれた地域であることを知りました。そして、私が見た光景は、実は以前からそこに存在していたのではなく、20世紀後半に、正確には1960年代に作り出されたものであることを知ったのです。驚くべきことに、この荒涼としたMill Creek Valleyには、かつてセントルイス最大のアフリカ系アメリカ人（黒人）の居住区が存在していたことがわかりました。では一体なぜ、このアフリカ系アメリカ人の居住区は跡形もなく消え去ってしまったのでしょうか？

その答えは、この時期に2人の民主党系市長が推進した都市再開発事業にありました。当時の新聞を読むと、このMill Creek Valleyの黒人居住区は、都市社会全体に脅威を与える、犯罪はびこる危険な「スラム」(slum)として描かれていることがわかります。そしてセントルイス市は、1億ドル以上もの予算を投じて、1958年にMill Creek Valleyの再開発、実際には徹底的な「土地整理」(clearance)に着手し、その完全更地化による「スラム」の一掃を行っていったのです。図1（次頁）は、1965年頃のMill Creek Valleyの様子を伝える写真ですが、更地化が、いかに凄まじいものであったのかがうかがえます。広さにして約80ブロックの土地（熊大の武夫原グラウンド約80個分を想像してください）が更地にされ、約6000もの建物が取り壊されました（そこには、約2万人のアフリカ系アメリカ人が住んでいたとされています）。日本人には心痛む表現ですが、地元紙『セントルイス・ポスト・ディスパッチ』紙(*St. Louis Post Dispatch*)は、この更地化の様子を“Hiroshima Flat”（「ヒロシマの平地」）と表現し、「スラム」の一掃を歓迎しました。同時に再開発事業では、更地を貫く高速道路、すなわち、ダウントウンとミッドタウンの商業地区を結ぶインターステイト・ハイウェイが建設されました。Mill Creek Valleyは、いまや通過交通のための巨大な空き地となり、こうして私が見た風景が出来上がったのです。

図1 Mill Creek Valley, c.1965



Courtesy of the Ted McCrea
Collection, Missouri
Historical Society, St. Louis

それでは一体、この Mill Creek Valley の物語は、表題に掲げたパブリック・ヒストリーというものと、どう結びついているのでしょうか。上述したように、同時代の新聞をみると、Mill Creek Valley は常に、住環境の欠如した犯罪の温床としての「スラム」というイメージで語られています。同様に歴史家の叙述をみても、その立場が再開発に反対するものであれ、支持するものであれ、あるいはより複雑な立場のものであれ、Mill Creek Valley は悲惨なアフリカ系アメリカ人の「スラム」として言及されています。例えば、著名なセントルイス史家ジェームズ・プリム (James Primm) も、その代表作『河の谷のライオン——1764～1980年のミズーリ州セントルイスの歴史——』(*Lion of the Valley: St. Louis, Missouri, 1764-1980*) (第3版、1998年刊) の中で、この都市再開発 (urban renewal) が実際には「黒人の追い出し」(black removal) であったことを指摘しつつも、Mill Creek Valley が、極貧の黒人層が住む、衛生的に「最悪な地区」(the worst area) であったと叙述しています。こうした記述から私自身も、再開発以前の Mill Creek Valley を、都市社会の底辺に生きるアフリカ系アメリカ人たちの過酷な「スラム」として認識したのでした。

しかしこうした認識は、物事の一部のみをとらえた誤ったものであることがわかったのです。講義の準備中、気晴らしをかねてセントルイスのラジオ番組 *St. Louis on the Air* を聞いていたとき (今やインターネットを通じてセントルイスのラジオが聴けるのです!)、スピーカーから、ミズーリ大学セントルイス校でお世話になった私のアドバイザー、テリー・ジョーンズ (Terry Jones) の声が聞こえてきたのです。番組では、テリーの他に、かつて Mill Creek Valley で子ども時代を過ごした2人の黒人女性グウェン・ムーア (Gwen Moore) とリサ・ゲイツ (Lisa Gates) が、「Mill Creek Valley の記憶を紡ぐ」(“Remembering Mill Creek Valley”) というテーマで、市民参加のパネル・ディスカッションを行っていました。そこではグウェンさんが、怒りを込めて次のことを繰り返して強調していたのです。

「これまで Mill Creek Valley について言われてきたことは、すべてネガティブなことばかりでした (everything was negative)。しかし私にはポジティブな思い出しかありません。Mill Creek Valley には、豊かな環境をもった活きたコミュニティが存在していたのです」。豊かな環境、活きたコミュニティとはどういうことなのだろうか？そこは「どん底のスラム」ではなかったのか？私は、この発言が引き金となって、Mill Creek Valley を内側の視点から再検討しなければならないと考えるようになりました。

図2 Moving-Day



St Louis Post Dispatch File Photo

図2をご覧ください。これは、「出発の日」と題した、Mill Creek Valley の家族の集合写真です。Mill Creek Valley を離れる引っ越しの日に、最後の思い出として撮ったのでしよう。着目してほしいのは、家族の服装です。みなきちんとした格好をしています。もちろん、「一張羅ぐらいはもっていたのだろう」という考え方もありますが、しかし貧困家族の姿には見えません。むしろそこに映し出されているのは、ある程度裕福な、ミドルクラスのアフリカ系アメリカ人の家族であるように思えるのです。「スラム」という表象は間違っていたのではないか？この写真を見たとき、グウェンさんの言葉がリアルな響きをもって私の中に飛び込んできました。

実は現在、大学の研究者、地元のコミュニティ組織、学生や市民のNPO、ミュージアムやライブラリー、歴史協会、小学校などの学校関係者・教員（そして時に子どもたち）が主体的な共同参加者となって、インターネットやSNSを駆使しながら、聞き取り調査、写真や手紙などの遺品収集、そしてコミュニティ・メンバーを交えた討論会を実施し、Mill Creek Valley の「見ようとしてこなかった過去の記憶」（「ブラインド・メモリー」 “Blind Memory”）

を取り戻すプロジェクトを推し進めています。そしてこうした試みから、以下のことが明らかとなりました。それは一言で言うならば、「スラム」とはほど遠い「豊かな歴史ある近隣共同体」(“rich historical neighborhood”)の姿だったのです。

まず Mill Creek Valley には、800 以上の商業ビルや店舗が存在していたことがわかっています。そこには、レストラン、食料品店、衣料店などの生活と結びついた小営業の店はもちろんのこと、劇場をはじめとした娯楽施設、病院、さらには銀行や新聞社まで存在していたのです。たとえば、ブッカー・T・ワシントン劇場 (Booker T. Washington Theatre) は、20 世紀初頭にアフリカ系アメリカ人によって経営された合衆国で最初の劇場の一つであり、ボードヴィルをはじめとした様々なライブ・パフォーマンスはもちろん、映画も上映していました。劇場オーナーのチャールズ・ターピン (Charles Turpin) は、映画製作のパイオニアでもあり、アフリカ系アメリカ人の地位向上を目指す政治活動を支援した人物でもあります。Mill Creek Valley には、セントルイス初の黒人野球チーム、セントルイス・ジャイアンツのホーム・グラウンドもありました (図3 参照)。この地区のビジネスの中心となったのは、「ピープルズ・ファイナンス・コーポレーション」(People's Finance Corporation) の 5 階建てのビルです。その 1 階には、アフリカ系アメリカ人が経営するセントルイスで最初の銀行が営業していました。この銀行の融資により、この地区の多くのアフリカ系の人たちのビジネスと雇用が支えられていたのです。またこのビルには、法律事務所、医療施設、そして『セントルイス・アメリカン』紙 (*St. Louis American*) を発行する新聞社も入っていました。Mill Creek Valley においてはもう一紙、『セントルイス・アルゴス』紙 (*St. Louis Argus*) が発行されています。

図3 St. Louis Negro League Team



Courtesy of National Baseball Hall of Fame and Museum, Cooperstown, N.Y.

またこの地区には、小学校やハイ・スクール、YMCA、そして 43 もの歴史ある教会が存在していました。1887 年に、アフリカ系アメリカ人の実業家たちによって創設されたのが Pine

Street YMCA です。このYMCAには、青少年のためのスイミング・プール、体育館、集会場、寮などが整備されており、著名な黒人指導者たちもここで講演を行っています。また建築史家たちにより、この地区に存在していた建物や家屋の多くが、実は19世紀後半のセントルイスの未曾有の繁栄期に建てられた、ビクトリア様式の歴史的価値ある建造物であったことも確認されています。すなわち、研究者と市民の共同作業によって再発見された Mill Creek Valley の姿とは、「ソーシャル・キャピタル」に支えられた、ミドルクラスを広範に内包する活力ある黒人コミュニティの姿であったのです。もちろん、貧困層もこの地区には数多く存在していたでしょう。しかしそれは全体を表すものでは決してなく、犯罪と貧困が蔓延する悲惨な「スラム」の表象は、むしろ外側からの観察によって造り出された一面的な像（“imagined slum”）であったと考えられるようになったのです。

こうした Mill Creek Valley の再発見を念頭に置きながら、最後にここで、パブリック・ヒストリーとは何かについて説明することにいたしましょう。それは、次のような特徴をもつ、地域社会史の新しい考え方・手法であると言えます。すなわち第一に、これまで「見ようとしてこなかった過去の記憶」（「ブラインド・メモリー」）に光を当て、地域社会を構成する多様な人びとの「主体的な生」（agency）を紡ぎ出し、地域社会の「歴史のデモクラシー化」（democratizing）を図ろうとするものであること。その際、文字史料だけではなく、聞き取り調査やインタビューを用いたオーラル・ヒストリー（oral history）が重要視され、同時に考古学的成果にも着目しながら、モノや建造物を『『主体的な生』の声の断片』として用いるマテリアル・カルチャー（material culture）の手法が積極的に活用されます。そして第二に、「歴史のデモクラシー化」は、これまで大学研究者が独占的な地位を占めてきた歴史学のあり方そのものにも適用されなければならず、地域社会に生きる多様な人びととの共同参加のプロジェクトとして、歴史を紡ぎ出し、解釈し、そして共有するプロセスを実践していこうとするものであること。この点でパブリック・ヒストリーは、歴史学を少数の研究者相手の仕事として考える「アカデミック・ヒストリー」（academic history）のスタンスとは対極をなすものであると言えるでしょう。歴史研究者もまた、共同参加者の一人なのであり、専門的知識を提供する補助者の役割を担うものとして位置づけられるのです。そして、これまで述べてきた Mill Creek Valley の再発見のプロセスは、まさにこのような第一と第二の特徴を示す、パブリック・ヒストリーの実践であったと言えるのです。そして第三にパブリック・ヒストリーは、こうした「主体的な生」に彩られた多文化主義的な歴史とその遺産（モノや建造物）を、地域社会の価値ある資源・資産として保存・共有し、積極的に活用していこうとする特徴をもっています。「肌の色」の問題がいまだ重要性をもつアメリカ社会において、Mill Creek Valley に活力ある豊かな黒人コミュニティが存在していたことは、セントルイスの地域社会に生きるすべてのアフリカ系の人びとに、自分たちの過去に対するプライドを取り戻させ、そして自分たちもまた地域社会の価値ある一員であったのだということを認識させる力となっているのです。

以上が、今回のエッセイの中で私がお話したかったことです。確かに、西洋史に取り組む私たちにとって、歴史をその地域社会の人びとと共に築き上げるというパブリック・ヒストリーの実践は難しいかもしれません。しかし、「歴史のデモクラシー化」というそのメッセージは、「歴史学は何のために、そして誰に向かってするものなのか？」というシンプルで根源的な問いを、すがすがしい響きをもって私に投げかけてくれるのです。